

32	島根県立邇摩高等学校	全日制	総合学科	26～28
----	------------	-----	------	-------

平成28年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

高等学校に在籍する障がいのある生徒の自立と社会参加を図るため、特別支援学校や発達障害者支援センター等と連携して、自立活動を取り入れた特別の教育課程の編成及び一斉授業の改善工夫に関する研究開発

2 研究の概要

対象となる障がいを有する生徒については、クラスや部活動の仲間との対人関係に困難さを示すことが多いことから、自立活動の「人間関係の形成」に関する指導を中心に週2コマ（年間70単位時間）を設定する。特別支援学校の協力を得ながら、個別の教育支援計画および個別の指導計画を作成し、それらに基づく指導と評価方法等について研究する。

また、一斉指導の改善においては、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業やICT機器を活用した授業をとおして、校内環境の整備や授業の「見える化（視覚化）」を図るなど、支援の在り方について研究する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究開始時の状況と研究の目的

平成21年4月に校地内に知的障がいを有する生徒を対象とした高等部が出雲養護学校邇摩分教室として設置され、年間を通して生徒同士の交流及び共同学習や教員間の特別支援教育に関する合同研修を実施している。一方、本校の生徒の中にも、中学校時に通級による指導を受けたり、発達障がい等の診断がある旨の報告を保護者から受けたりするなど、特別な支援や継続した特別支援教育を必要とする生徒の数が年々増加する傾向にあり、その対応が急がれる状況であった。

これらの状況を改善するために、自立活動を取り入れた特別の教育課程の編成及び一斉授業の改善工夫に関する研究の開発を行うこととした。

（2）研究仮説

- ① 隣接する特別支援学校分教室の自立活動担当教員が訪問指導することにより、障がいを有する生徒への自立活動の指導を通して、「人間関係の形成」および「コミュニケーション」を中心としたスキルを身につけ、授業時間や休み時間、部活動等の学校生活において、より円滑な人間関係を築くために適した行動をとることができる。
- ② 教務部を中心として、「ユニバーサルデザインの視点」と「ICT機器の活用」の双方向から一斉指導の改善工夫を行うことで、障がいのある生徒にとっても、障がいのない生徒にとっても、「わかりやすい授業」を行うことができる。

（3）教育課程の特例

研究開発3年次においては、対象となる1年生7名について、単位数として含めない授業時間外（課外）に以下のような指導を実施した。なお、2・3年生には教育課程の特例である自立活動（授業名「煌めく羅針盤」）を実施した。

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数
「自立活動」の指導 ※ただし、1年生は授業時数、単位数として含めない	2・3年生の自立活動に向けての事前指導 ・障がいの認識や自己理解 ・感情やストレス対処のスキルを習得する	1年次：課外 ※実施時間数 (各生徒3回程度)
「自立活動」の指導 (授業名：煌めく羅針盤)	L S T (ライフスキルトレーニング) の実施 ・自己や他者を理解する ・効果的なコミュニケーションのスキルを習得する	2年次：70時間 (2単位)
「自立活動」の指導 (授業名：煌めく羅針盤)	キャリアトレーニングの実施 ・卒業後の社会生活に必要な知識やスキルを習得する	3年次：70時間 (2単位)

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

生徒が感じている学習に対する困難さの実態把握を行い、一斉授業の改善としてユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業展開を段階的に試みるとともに、校内ICT機器の充実を図った。

① ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり

- ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業展開に取り組む先進校視察や研修会への参加及び校内研修会の実施
- ICT機器を活用している先進校視察や研修会への参加及び校内研修会の実施
- ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業展開及び環境整備の検討
- ユニバーサルデザインに関する「邇摩高ルール」の考案

一斉授業に関して

- ・本時の目標と1時間の流れを明記する
- ・全科目でチョークの色を統一する
- ・プリントと板書の関係を整合させる
- ・本時のまとめを明記する
- ・授業の規律を守る

環境整備に関して

- ・黒板は授業関係の事柄のみ板書する
- ・教室内の掲示物を減らし、整理する
- ・校舎内の掲示場所を指定する
- ・配布物を精選する

② ICT機器の活用の充実

- ICT機器の導入
電子黒板 タブレットPC 移動式モニタ ディスプレイアダプタ
- ICT環境の整備
無線アンテナ
- ICT機器の活用方法の提案（教員個々の活用能力に応じた利用を積極的に促す）
 - ・導入時の活用（静止画、自作動画、WEBサイトの利用）
 - ・電子黒板の活用（生徒の考えを瞬時に共有）
 - ・書画カメラとしての活用（教員や生徒の手元を提示）
 - ・ソフトの活用（パワーポイント、Wordなど）

(5) 研究成果の評価方法

① 行動分析調査

対象生徒の行動的特徴を授業および休憩時間、部活動等において、関係のある全ての教職員が入力できるシステムを利用する。

② アンケート調査

対象の生徒およびその保護者が、学校生活や家庭生活において、研究仮説における評価をアンケート方式で行う。

③ 面談

担任が対象生徒およびその保護者に対して面談を行い、具体的な様子を聞き取ることで評価し、今後の指導についての改善を図る。

④ 運営指導委員会での評価

行動分析調査とアンケート調査、面談の結果をまとめ、生徒一人一人の目標の達成度と学校全体としての達成度を運営指導委員会で評価する。

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容

別紙①のとおり

(2) 全課程の修了認定の要件

別紙①のとおり

(3) 研究の経過

	実施内容等		
	概要	前期	後期
第1年次 (26年度)	教育課程の特例に向けた準備、一部試行的実施	<input type="checkbox"/> 運営指導委員会の委員選出 <input checked="" type="checkbox"/> 運営指導委員会の開催（教育課程編成等） <input checked="" type="checkbox"/> 事業推進会議の開催（月1回） <input checked="" type="checkbox"/> 連絡協議会への参加 <input checked="" type="checkbox"/> 校内研修会の開催（事業の周知、一斉授業の在り方等） <input checked="" type="checkbox"/> 邇摩高校と出雲養護学校の協議 <input type="checkbox"/> 生徒及び保護者への説明（1年生） （本事業・自立活動の実施について）	<input checked="" type="checkbox"/> 研究協議会への参加 <input checked="" type="checkbox"/> 事業推進会議の開催（月1回） <input type="checkbox"/> 一斉授業の改善工夫に向けた準備 <input checked="" type="checkbox"/> 自立活動担当教員の研修 <input checked="" type="checkbox"/> 先進校視察 <input type="checkbox"/> 1年生対象生徒及びその保護者への説明（自立活動の実施について） <input type="checkbox"/> 放課後を利用した、自立活動試行的実施 <input checked="" type="checkbox"/> 運営指導委員会の開催（一年次の課題と改善） <input type="checkbox"/> 一年次評価とまとめ（報告書作成） <input type="checkbox"/> 二年次計画作成
第2年次 (27年度)	教育課程の特例の適用、一斉授業の改善の実施	<input type="checkbox"/> 自立活動担当教員の兼務発令 <input checked="" type="checkbox"/> 事業推進会議の開催（月1回） <input checked="" type="checkbox"/> 校内研修会の開催（事業二年次の実施について） <input type="checkbox"/> 対象生徒及び保護者への説明 <input type="checkbox"/> 自立活動の実施及び一斉授業の改善工夫	<input checked="" type="checkbox"/> 運営指導委員会の開催（前期の振り返り） <input checked="" type="checkbox"/> 事業推進会議の開催（月1回） <input type="checkbox"/> 自立活動の実施及び一斉授業の改善工夫 <input checked="" type="checkbox"/> 先進校視察 <input type="checkbox"/> 1年生対象生徒及びその保護者への説明（自立活動の実施について）

		<input type="checkbox"/> 前期評価 <input checked="" type="checkbox"/> 自立活動担当教員等の研修 <input type="checkbox"/> 生徒及び保護者への説明（1年生） （本事業・自立活動の実施について） <input type="checkbox"/> 保護者との面談（2年生）	<input type="checkbox"/> 放課後を利用した、自立活動施行的実施 <input type="checkbox"/> 保護者との面談（2年生） <input checked="" type="checkbox"/> 運営指導委員会の開催（二年次の課題と改善） <input type="checkbox"/> 後期評価 <input type="checkbox"/> 二年次評価と三年次計画の作成 <input type="checkbox"/> 二年次まとめと報告書作成
第3年次 (28年度)	2年目の実施 結果を踏まえた改善実施	<input type="checkbox"/> 自立活動担当教員の兼務発令 <input checked="" type="checkbox"/> 事業推進会議の開催（月1回） <input checked="" type="checkbox"/> 校内研修会の開催 （事業三年次の実施について） <input type="checkbox"/> 対象生徒及び保護者への説明 <input type="checkbox"/> 自立活動の実施及び一斉授業の改善工夫 <input type="checkbox"/> 前期評価 <input checked="" type="checkbox"/> 自立活動担当教員等の研修 <input checked="" type="checkbox"/> 先進校視察	<input checked="" type="checkbox"/> 運営指導委員会の開催（前期の振り返り） <input checked="" type="checkbox"/> 事業推進会議の開催（年1回） <input type="checkbox"/> 自立活動の実施及び一斉授業の改善工夫 <input type="checkbox"/> 後期評価 <input checked="" type="checkbox"/> 運営指導委員会の開催 （三年次の成果及び課題のまとめ） <input type="checkbox"/> 三年次評価と四年次計画の作成 <input type="checkbox"/> 三年次まとめと報告書作成
第4年次 (29年度)	3年目の実施 結果を踏まえた改善実施	<input type="checkbox"/> 自立活動担当教員の兼務発令 <input checked="" type="checkbox"/> 事業推進会議の開催（月1回） <input checked="" type="checkbox"/> 校内研修会の開催 （事業四年次の実施について） <input type="checkbox"/> 対象生徒及び保護者への説明 <input type="checkbox"/> 自立活動の実施及び一斉授業の改善工夫 <input type="checkbox"/> 前期評価 <input checked="" type="checkbox"/> 自立活動担当教員等の研修 <input checked="" type="checkbox"/> 先進校視察 <input checked="" type="checkbox"/> 研究協議会への参加 <input checked="" type="checkbox"/> 就労支援会議の開催 （3年生の進路に関するケース会議） <input checked="" type="checkbox"/> アフターケアの実施 （卒業後の進路先との連携）	<input checked="" type="checkbox"/> 運営指導委員会の開催（前期の振り返り） <input checked="" type="checkbox"/> 事業推進会議の開催（月1回） <input type="checkbox"/> 自立活動の実施及び一斉授業の改善工夫 <input type="checkbox"/> 後期評価 <input checked="" type="checkbox"/> 運営指導委員会の開催 （四年次の成果及び課題のまとめ） <input checked="" type="checkbox"/> 就労支援会議の開催 （3年生の進路に関するケース会） <input checked="" type="checkbox"/> 移行支援会議の開催 （卒業後の進路先とのケース会） <input checked="" type="checkbox"/> アフターケアの実施 （卒業後の進路先との連携） <input type="checkbox"/> 本事業の成果とまとめ <input type="checkbox"/> 報告書作成と事業報告

（4）評価に関する取組

		評価計画
第1年次 (26年度)	ア 教育課程の編成	・自立活動を取り入れた、教育課程を編成することができたか
	イ 生徒及び保護者への説明	・自立活動について、対象生徒および保護者に説明し、理解を得ることができたか
	ウ 自立活動の試行的実施	・自立活動を通常の授業に加えて試行的に実施し、成果及び課題を見出すことができたか
第2年次 (27年度)	ア 行動分析調査	・対象生徒の行動について、関係のある教職員が記入し、分析することができたか（随時、学期末に分析）
	イ アンケート調査	・対象生徒および保護者に対して、研究仮説に基づくアンケートを実施することができたか（年度末に実施） ・教員に対して、一斉授業の改善工夫について取組むことができたか

	ウ 面談	・対象生徒及び保護者に対して面談を行い、成果及び課題を共有し、今後の指導について改善を図ることができたか（年度末に実施）
	エ 総合評価	・ア～ウについて関係者が総合的に評価し、成果及び課題を共有し、今後の指導について改善を図ることができたか（年度末に実施）
第3年次 (28年度)	ア 行動分析調査	・対象生徒の行動について、関係する教職員が記入し、分析することができたか（随時、学期末に分析）
	イ アンケート調査	・対象生徒及び保護者に対して、研究仮説に基づくアンケートを実施することができたか（年度末に実施） ・教員に対して、一斉授業の改善工夫について取り組むことができたか
	ウ 面談	・対象生徒及び保護者に対して面談を行い、成果及び今後の学校生活、社会生活を送る上での課題を共有することができたか（年度末に実施）
	エ 総合評価	・ア～ウについて関係者が総合的に評価し、研究仮説を検証することができたか（年度末に実施） ・今後の高等学校における特別支援教育の在り方（体制整備等）について考えることができたか（年度末に実施）
第4年次 (29年度)	ア 行動分析調査	・対象生徒の行動について、関係する教職員が記入し、分析することができたか（随時、学期末に分析）
	イ アンケート調査	・対象生徒及び保護者に対して、研究仮説に基づくアンケートを実施することができたか（年度末に実施） ・教員に対して、一斉授業の改善工夫について取り組むことができたか
	ウ 面談	・対象生徒及び保護者に対して面談を行い、成果及び今後の学校生活、社会生活を送る上での課題を共有することができたか（年度末に実施）
	エ 総合評価	・ア～ウについて関係者が総合的に評価し、研究仮説を検証することができたか（年度末に実施） ・今後の高等学校における特別支援教育の在り方（体制整備等）について考えることができたか（年度末に実施）

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 生徒への効果

(ア) 自立活動の実施対象生徒

生徒の自立活動記録用紙とアンケート結果および指導担当教員の記録から以下のような効果が見られた。

【3年生】

生徒A：自立活動への取組は大変積極的であった。コミュニケーションはとれるが、他者との関わり方に課題があり、学習場面においても、趣味や得意分野の話題となると多弁になることがあった。しかし、授業を通して少しずつ自分の思いと相手の意見をうまく調整しながら話すことができるようになった。職場体験実習を通じて、自己の課題に気づき努力する姿勢が伺えた。また、自らの身体的な障がいとうまく付き合いながら卒業後の社会生活がイメージすることができた。

生徒B：自立活動への取組は大変真面目であった。聴覚障がいのためコミュニケーションには苦手意識があり、自ら話しかけることは出来なかった。しかし、職場体験実習では自主性や積極的に質問する姿勢が見られ、学校生活でも履修生同士や担当教員

などに話しかけることができるようになった。会話の際には、相手の口元をしっかりと見たり、うなずいたりして意思表示をするなど、自分なりのコミュニケーションの方法をとることができた。また、自己理解が進み、自己の可能性や新たな職種に挑戦したいという思いが生まれ、公務員試験に挑戦した。

生徒C：本生徒は障がいの診断はなく、1年次の学校生活の様子から、対象生徒とし履修を開始した。今年度初めは自立活動に対する消極的な様子が伺えた。特定の友人とは関わりが持てるものの、集団内の関係作りに困難さを抱えていおり、そのことについての自己理解が十分でなく、今の自分を取り巻く環境に満足しているところがあった。自立活動の授業を通して、履修生徒との会話や関わりも増え、授業担当教員に話しかける場面も増えた。職場体験実習では、実習先からの評価を受け、コミュニケーションや身だしなみ等、自己の課題に気づき、2回目以降の実習では改善しようと努力する姿勢が見られた。

生徒D：本生徒は自立活動に対して大変肯定的で、与えられた課題に対し丁寧に取り組み、自己の力とした。通常の学校生活で支障は感じられないが、学習活動においては、頭の中で考えていることを整理して簡潔に言葉にすることに困難さを感じていた。ワークシートへの記入など文字化する活動を通して、自分の思いをきちんと相手に伝えることができるようになった。また、グループ学習を繰り返すことで、自己の考えを言葉にする事に慣れてきた。職場体験実習にも意欲的に取り組み、自分の力を見極めて必要な支援について考えることが出来た。就職内定先で実習を行うことで、卒業後の社会生活に対する不安が取り除かれた。

【2年生】

生徒E：教員とのコミュニケーションが増え、担任や保健室教員との雑談もできるようになった。また生徒同士の関係も系列やクラス・履修生の中で生まれ、会話や共に行動する様子も見られるようになった。1年次終わりには、ペア・グループ学習に抵抗感を感じていたが、実施後は履修生との学習を楽しみ、その中で自己表現したり他者の意見を聞いたりして、成長できたと回答している。しかし、1年次と比べると自己の思いを話す時間は減っているため、物足りなくも感じていることがアンケートから分かり、個別指導を増やした。また、教員との会話が増えるにつれ、場にそぐわない発言やけじめのない態度も見られた。これについても特性として受け止めつつ適切に指導したい。

生徒F：成績不振、人間不信感、障がいの受容など、本人にとって精神的に苦しいことが重なり、不登校の状態が続き9月より休学した。欠席が続いたため、授業外での個別の対応とし、本人及び保護者面談には担任と共に特別支援教育コーディネーターも同席したり、医療機関や外部支援機関と連携しながら支援を続けている。

生徒G：1年次は人間関係が希薄で一人で行動することが多かったが、2年次は履修生内で人間関係が生まれ、昼食時や休憩時間も友人と会話する様子が見られた。自立活動において、ペア・グループ学習やゲーム教材を活用する事で、コミュニケーションをはかる良いきっかけとなった。個別指導とグループ学習が効果的に作用し、自己理解が進み、自分の思いや悩みを話すことが出来るようになった。

生徒H：1年次は順調に高校生活を送り、中学時（不登校や適応教室）と比べ自己肯定観は上がっていた。しかし、今年度は家庭環境の変化から体調を崩し、保健室来室や欠席も増えた。ストレスに弱く、不安が大きくなり、体調に表れる傾向にある。自立活動には前向きに取り組み、特にインターンシップ後の振り返りと将来の生活設計の

授業では、働くことと将来の消費生活が繋がり、自己の将来設計がより現実的にイメージできた様子であった。また、個別指導では感情のコントロールについて自己分析し、怒りや不安、ストレスの発散について考えることが出来た。

生徒 I：本人の特性と服薬管理、家庭の状況等の様々な影響により、欠席や遅刻等が増え、自立活動に対して消極的な時期もあった。しかし、コミュニケーション力はあるため、自立活動でのペア・グループワークでは自分の思いを語りしっかりした考え方を述べることができた。自己分析や考えを言葉で表現し、リーダーシップもとれるため、他生徒にも良い影響を与えた。また、文化祭ステージ発表に出演できたことが自信につながった。先輩・後輩や苦手意識のあった同級生から好意的な評価を受け、人間関係作りの苦手感が和らぎ、「人は変わるんだな」といった他者理解も進んだ。

【1年生】

体験授業として、7名の生徒に3回の自立活動を課外に行った。第1回は自己紹介と自立活動の内容について説明し、履修を希望するきっかけや困り感について、個々に話すことが出来た。「個々の課題について、オーダーメイドの授業である」ことが、授業担当教員から伝えられ、生徒自身は「自分だけの時間である」という期待感を持つことができたと感じる。受容する言葉がけに安心する生徒も多かった。2回目以降は、各自の困り感や課題について面談形式で実施し、自己理解に取り組んだ。

(イ) 対象以外の生徒

履修生徒に関する発達障がいの特徴や配慮事項について、改めて他の生徒に説明することはしていないが、その特徴を個性やキャラクターとして捉えて接しているように感じる。教員アンケート結果からは「他の生徒が思いやりを持って接するようになった」「文化祭等で仲間に入れようとする姿が見られた」「話す機会が増え、履修生徒が明るくなった。落ち着いて生活している」等、好意的な評価が多い。履修生徒がからかいの対象となる場合も時にはあるが、生徒指導部と連携し、丁寧に話を聞きながら指導に当たっている。

これまででも、隣接する特別支援学校高等部分教室の生徒たちとの交流及び共同学習を通して特別支援教育への理解は進んでいたが、本校の中での支援が必要な生徒に対しても、共に学習や行事に取り組むべき集団の一員として認めている。

(ウ) 一斉授業の工夫・改善（対象生徒・対象以外の生徒への効果）

本校の抱える課題として、特別な配慮が必要となる、気になる生徒に対してだけでなく、生徒一人一人の基礎学力の向上や総合学科である本校では、11教科約140の講座があり、各教員の教授方法の違いもあり生徒の戸惑いがあるということ。また、授業の規律などがあげられる。

そこで、一斉授業の改善を行い、これらの課題を克服していきたいと考えた。「ユニバーサルデザインの視点」と「ICT機器の活用」を二本柱として取り組むことによって、学習に困難を示す生徒に対して支援を全体に広げることで、他の生徒にもより一層「わかりやすい授業」となる。つまり、特別支援教育の視点を取り入れ、支援を必要とする生徒にとってわかりやすい授業を目指すことで、その他の生徒にとってもわかりやすい授業となると考えている。「わかる」という実感を得ることが重要であり、生徒に「わかる」という体験をさせることで、学習へのやる気につながると考える。

京都教育大学相澤教授の特別講義、先進校視察や校内研修会を経て、一斉授業の改善

として「邇摩高ルール」を考案し、前期に試行期間を設け、後期から完全実施とした。

「邇摩高ルール」の効果を検証するため、生徒は11月22日、教員は11月2日にそれぞれ質問紙調査を実施した。なお、自立活動受講者の思いを正確に把握するため、記名式とした。生徒及び教員の各問への回答は、両者とも肯定的な意見がほとんどであった。小さな修正点はいくつかあるが、「邇摩高ルール」が生徒の学習理解に有効であると判断できる。授業に関して、「本時の流れの明記」に関しては、全生徒のうち54%が「わかりやすい」、自立活動受講者は71%が「わかりやすい」と感じている。また、「チョーク・ホワイトボードマーカーの色」に関する質問項目についても、自立活動受講生のうち72%が「わかりやすい」と回答している。この2つの質問以外にもどの回答を見ても、自立活動を受講している生徒が「わかりやすい」と感じている現状があると判断できるとともに、自立活動受講生がわかりやすさを感じている項目に対して、その他の生徒もある程度「わかりやすい」、もしくは「かわらない」という思いがあることがわかった。

校内の環境整備に関しては、「黒板右横へのホワイトボードの設置」について肯定的な意見が多く、生徒全体では57%、自立活動受講生は86%が「授業に集中しやすい」と回答している。一方で、完全実施のおよそ1カ月後に実施した質問紙調査であったため、徹底が不十分であったことが窺え、教室内の掲示物削減及び校舎内の掲示物の掲示場所精選については、今後も時間をかけ、ゆっくり慣れていく必要性を感じている。

I C T機器の活用に関しては、生徒の理解に視覚的に効果をもたらすだけでなく、グループ活動においても互いの意見を瞬時に共有でき、より充実した学習活動につなげていくことができると判断できる。

② 教員への効果

学校全体での特別支援教育を管理職のリーダーシップのもと取り組むことが出来た。校内組織の連携としては、担任・特別支援教育コーディネーター(以下、「特別支援教育CO」と表記する)・学年会・生徒指導部・進路指導部の連携の機会が増えた。特に3年生進路決定の場面では、職場体験実習、就労支援会議等、障がい者雇用の仕組みや流れはこれまではない進路指導の形であった。

また、教員の大半が発達障がい等の特性や対応について以前より理解が深まり、その視点をふまえて、生徒の困り感を意識し対応しようとする姿勢が全体に広がった。ユニバーサルデザインを意識し、全教員で授業の統一ルールやI C T機器活用への取組、生徒面談や生徒指導・進路指導における生徒の特性を配慮した言葉かけや指導のしかたを検討した。しかし、「支援が必要な生徒だ」と感じている、見立てに自信が持てなかったり、適切な支援、配慮の程度、他生徒との公平感などに迷ったりすることも多かった。ケース会議や授業担当者会での情報共有や協議、専門的視点からの助言が必要であると感じた。

③ 保護者等への効果

1年生保護者は、本校の特別支援教育を希望して子どもを入学させるケースも増え、年度当初から支援の相談や自立活動受講希望があった。履修希望の生徒の保護者は「特別支援教育」という言葉を否定的に捉えるケースはほとんどなく、子どもの人間関係や学校生活上の困り感を理解し、自立活動履修に賛成された。中には、保護者は希望するが、子どもは拒否するケースもあり、この場合は履修には至らなかったが、特別支援教育の視点で見守りたいという学校の考えに、保護者は安心された様子であった。また、履修に懐疑的な保護者も、子どもの困り感を解決したいという思いは一致している。「障がい」という

言葉を用いず、生徒の困り感や履修希望の意思、支援について丁寧に説明することで合意形成できた。この3年間のうちに対応出来る事はしておきたいという卒業後の自立に向けた思いが保護者の言葉から感じ取れた。

2・3年生の履修生徒の保護者は、本校の取組をよく理解し、子どもの社会的自立に役立っていると評価している。生徒は家庭で自立活動の内容について話題にすることはあまりないが、履修していない生徒と比べ、担任との連絡や面談等、情報共有する回数は多い。特に3年生は進路決定の場面で、自立活動で行う職場体験実習や就労支援、個別相談会など、他生徒より手厚い支援を高く評価している。

④ その他

近隣の中学校や特別支援学校から、自立活動の取組についての問い合わせが増え、12月の実践報告会(県教委主催)には県内外小中高校・特別支援学校や教育委員会等から180名の参加があり、関心の高さがうかがえた。また、小中高校間の連携や引き継ぎがお互いに重要であることが再認識できた。

本事業の実施について、県内外の大学や高校教員や学生等からの学校訪問依頼が増えた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

- ①自立活動履修生が3学年揃い16名となった。履修に至らなかった生徒も数名おり、自立活動以外の場面での支援や対応も必要となる。また、特別支援教育COは保健室に常駐のため不登校生徒の対応にも追われている。特別支援教育COが教科指導や担任業務を行いながら、コーディネーター業務を円滑に実施することは時間的に困難な場面も多く、教員数の確保が必要と考える。
- ②特別支援教育の免許を持つ自立活動担当教員の確保は継続した課題である。対象生徒の特性を正確にとらえ、適切な支援や自立活動を行うためには、専門性のある教員の存在と、その助言が不可欠と感じる。
- ③3年生の職場実習や就労について、進路指導部や学年会との密なる校内連携と、役割分担の整理が必要である。また、本モデル事業の4年次の継続に伴い、移行支援会議や卒業生のアフターフォローについて実践を含めた研究・評価を進めたい。
- ④リソースルーム(支援の必要な生徒が気持ちを落ち着かせるための部屋)を作る必要があり、保健部員や特別支援教育COが複数常駐する体制を構築していきたい。
- ⑤一斉授業の工夫・改善においては、検証結果より、それぞれの項目に対して、肯定的意見が多数得られた。しかし、「困難さ」を抱えている生徒はいないわけではない。この生徒たちは、教員による取り組みの差に戸惑っているのではないかと考えられる。環境整備に対しては、よくなったという意見は40%であること、また、教員からの記述では掲示物を自分で確認することが身につけていないのではという意見もあった。配布物についてもまだまだ精選が必要である。また、ICT環境に関しては、機器の整備や機器をより充実したものにすることが必要だと感じている。今後、一人でも「困難さ」や「戸惑い」を感じている生徒がいるのならば、その少数派の生徒へのアプローチをしっかりと考えていきたい。そのためには、もう少し時間がかかるが、生徒への周知徹底を図ること。また、教員に対して、ユニバーサルデザインに関する研修や、ICT機器の操作講習会など勉強会を重ね、知識や技術の向上を目指す必要がある。また、全教員の差をなくし、全教員で同じ意識を持って取り組むことが重要である。これから、邇摩高校全体で取り組んでいき、試行錯誤を重ねながら、1人でも多くの生徒が「わかる」という実感を得ることが出来るように、今後も研鑽を積んでいきたい。